OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『和漢兼作集』漢詩撰者考
Author(s)	仁木, 夏実
Citation	詞林. 2018, 64, p. 32-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70609
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

https://doi.org/10.18910/70609　詞林　第64号　2018年10月

『和漢兼作集』漢詩撰者考

仁木　夏実

はじめに

『和漢兼作集』は、鎌倉時代中期成立と見られる詩歌集である。「兼作」とは漢詩と和歌両方を詠じること。漢詩と和歌いずれにも才能を発揮した人物の作を部類別に収める。もちろん、一人が漢詩と和歌双方の作品を詠じることは全く珍しいことではないが、本集に収められる漢詩は、漢詩とはいえすべて七言の二句一聯であり、そのように切り出された（あらかじめ二句一聯のみが作られることもあった）漢詩句と和歌を並べて同時に賞翫する詩歌会や詩歌合がたびたび催された後嵯峨院[1]治世から好文の亀山院、後宇多院時代の好尚[2]を伝えるものと言えよう。収載作品は平安時代初期の小野篁のものから成立時活躍していた人物の作まで長期間にわたり、特に現存作品に乏しい鎌倉時代漢詩の資料として注意される。しかし、和歌に関しては、解題などで出典や作者の傾向の分析がいくらか試みられているものの、漢詩に焦点が当てられることはこれまでほとんどなかった。

本稿の目的は『和漢兼作集』の漢詩撰者について検討を行い、未だ十分に解明されているとは言い難いその性格、成立の解明の足がかりとなることであり、そこからさらに鎌倉時代中期の漢詩を取り巻く環境の一端を明らかにすることである。

一

まず『和漢兼作集』について、これまでに知られているところをまとめておく。

伝本は長らく宮内庁書陵部蔵本（以下書陵部本）が知られているのみであったが[3]、近年その親本が冷泉家時雨亭文庫より見いだされた（以下冷泉家本[4]）。冷泉家本は書陵部本に見える、春部・秋部それぞれ上中下と、夏部・冬部それぞれ上下の上巻十巻（ただし冬下部は一丁を残し後欠）に加え、雑部と見られる下巻八丁分を持つ。この他、諸本や古筆切れに

『和漢兼作集』に収められていたことを注記するものがわずかに残る。また、これらとは全く異なり、作者別に配列した別本（いわゆる『別本和漢兼作集』）が存在するが[5]、これも巻六・七・八、すなわち中納言・参議・非参議の作を残すのみの零本であるので、今回の考察では参考にする程度にとどめておく。

現存する伝本はいずれも奥書を欠いており、成立に関して知られるところは少ない。先行研究では、作者の官位表記からは建治三年（一二七七）から弘安二年（一二七九）の間に成立したものと考えられること[6]と、「新院御製」が後宇多院を指すと考えられることから、その後伏見院の時代に増補された可能性[7]が指摘されている。この指摘の前半は冷泉家本の前表紙裏の貼紙に

亀山御製　院御製ト載之
続拾遺同比撰歟

とあること、すなわち亀山院の御製を「院御製」とすることから、弘安元年（一二七八）に撰進された「続拾遺和歌集」と同じ頃に選ばれたものではないかと推定されていることともおおむね合致する。

この他に本書の撰者について、岡山大学附属図書館池田家文庫蔵『歌書目録』[8]には次のような記述がある。

和漢兼作集　二十巻
前関白鷹司殿仰ニヨツテ在嗣朝臣詩ヲ集同元俊朝臣ニ仰テ和歌ヲ撰ハシム

従来この記述については、「元俊朝臣」を「光俊朝臣」の誤写と考え、「前関白鷹司殿」（鷹司兼平に比定される）の命により、菅原在嗣（一二三二～一三〇八）が漢詩を、葉室光俊（真観）（一二〇三～一二七六）が和歌を選んだものと解釈されてきた。全体が残っていればおそらく二〇〇〇首を数えたであろう本集の編纂に、漢詩担当者と和歌担当者がいるのは妥当であろうし、本書に、真観が選者を務めた勅撰集『続古今和歌集』や、その編纂に深く関わったと見られる私撰集『万代和歌集』や『秋風和歌集』と数多くの共通歌があること[9]と矛盾せず、有力な情報と言えるが、真観は一応完成したとされる建治三年の前年に死去しており、増補についてはまた別人の存在を想定しなければならない。

では漢詩の選者として名前を挙げられている菅原在嗣についてはどうだろうか。本書の漢詩選者としてふさわしい人物か検討を行わなければならないが、その前提として、次節では本書に所収される漢詩の作者について整理してゆきたい。

二

本書の漢詩句は次のように記載される。

元日賜宴　宮内卿三善清行〈七／一〉
不酔争辞温樹下　建春門外雪埋春

題と作者名の下に割注で書かれている数字は全体の入集数を漢詩数／和歌数の形で示している。前述した通り現存するのは全体の半分程度であるが、この数字が残る作者についてはある程度全体の入集状況を類推することができる（ただし、全ての作者についてこの注記があるわけではない）。

このことを踏まえて冷泉家本の漢詩入集数の上位者をまとめると下の【表1】『和漢兼作集』漢詩入集数上位者のようになる。

まず、全体の入集数注記と現存数を比較すると、入集数の約半数が残っていることが確認でき、現存する部分と今は失われている部分とで入集者の傾向が大きく変更されているということはなさそうである（ただし、藤原経範のように、注

【表1】『和漢兼作集』漢詩入集数上位者

入集数	作者	生没年	備考
11	菅原道真	845～903	〈二十五　十五〉
9	紀長谷雄	845～912	〈十五　三〉
7	大江以言	955～1010	
7	藤原良経	1169～1206	〈十二　十五〉「後京極摂政前太政大臣」
7	源師時	1077～1136	
6	藤原明衡	989～1066	〈十二　三〉藤原式家
6	源順	911～983	〈十三　九〉
6	藤原頼資	1182～1236	藤原北家資業流日野家。兼光男
6	藤原資実	1162～1223	藤原北家資業流日野家。兼光男
6	藤原親経	1151～1210	〈十　一〉藤原北家広業流。俊経男
6	藤原永範	1106～1180	藤原南家
6	藤原忠通	1097～1164	〈十三　十三〉「法性寺入道前関白太政大臣」
6	藤原義忠	？～1041	〈十　二〉藤原式家
5	大江匡衡	952～1012	
5	輔仁親王	1073～1119	〈十　七〉
5	藤原敦基	1046～1106	藤原式家。明衡男。敦光兄
5	橘正道	？	〈十　一〉天元（978～983）の初年頃没
5	橘直幹	？	937年対策及第、966年曲水宴参加

記では七首もの入集があるとされながら、現存部には一首も残らない者もいる）。顔ぶれは「聖廟御作」と作者表記され、他と区別されている菅原道真が最も多く、以下紀長谷雄、大江以言と続く。藤原良経や藤原頼資のような鎌倉時代の人物もいるが、平安時代を代表するような著名な漢詩人が多く、ここから特色を見出すことは難しいように思われる[10]。

ならば、成立と同時代の入集者に限ってみればどのようなことが言えるであろうか。成立と同時代であれば漢詩撰者と同時代人ということになり、撰者の立場がある程度類推できるはずである。また、同時代であれば格好の比較対象となる作品がある。「二十八品幷九品詩歌」と「現存三十六人詩歌」がそれである。

「二十八品幷九品詩歌」は、建長五年（一二五三）八月二十日の藤原定家の十三回忌に際してその追善のために勧進されたもので、「法華経」二十八品に「観無量義経」と「普賢経」、上品上生から下品下生までの九品を題として詠まれた詩歌である[11]。

また、「現存三十六人詩歌」は、建治二年（一二七六）閏三月に詩人と歌人それぞれ三十六人の図とその詩歌を描いた色紙を屏風に貼ったもので、時の鎌倉幕府執権北条時宗の命により、漢詩を藤原資宣、歌を真観が撰んだとされている[12]。

これらの漢詩作者と『和漢兼作集』の漢詩作者、特に成立と同時代の人物を比較すればどのようなことが言えるだろうか。今仮に一二〇〇年以降の出生を目安として儒者の家の人物と、和歌の撰者と目される藤原光俊（真観）の葉室家出身者とを比較すると次頁の**【表2】『和漢兼作集』「二十八品幷九品詩歌」「現存三十六人詩歌」入集当代儒者比較一覧**のようになる。

これらを一覧すると『和漢兼作集』に漢詩が入集する儒者については、他に比べ、菅原氏出身者が多いことが見て取れる。確かにこの時期の菅原氏は文章博士や式部大輔を輩出しており、当時の菅原氏儒者の活躍を物語るものとも言えるが、例えば「現存三十六人詩歌」の漢詩編者である藤原北家資業流の資宣の入集数がわずかに一首、同広業流出身で亀山院の侍読であった藤原俊国の入集がゼロであることと比較すれば、その扱いに明らかな差があることは否定しがたい。漢詩撰者は菅原氏に近い人物である可能性が高いと考えられ[13]、先に見た『歌書目録』に名前の挙がる菅原在嗣はまさにふさわしい人物のように考えられるが、どうであろうか。次節では彼の伝記を追って検証してみたい。

三

菅原在嗣は極官従二位、文章博士、式部大輔、後深草院侍読等を歴任した良頼（一一九四～一二七八）の息。詳しくは稿末の**【表3】菅原氏略系図**、**【表4】菅原在嗣・在匡年譜**を参照していただきたいが、貞永元年（一二三二）に生まれ、

【表２】「和漢兼作集」「二十八品幷九品詩歌」「現存三十六人詩歌」入集当代儒者比較一覧

		和漢兼作集入集数〈総入集数注記〉	二十八品幷九品詩歌	現存三十六人詩歌
菅原氏				
	菅原長茂(成)	4〈六／二〉	○	○
	菅原在章	3	○	
	菅原在嗣	1		
	菅原在匡	4〈六／五〉		○
	菅原高能	3		
	菅原在兼	1		
	菅原資宗	1		
	菅原義高	3〈六／一〉		
	菅原在範	1		
	菅原資高	1		
	菅原公良		○	
	菅原良頼		○	○
	菅原在宗			○
資業流				
	藤原光国	1	○	
	藤原資宣	1		○
	藤原資兼			○
広業流				
	藤原経光	2	○	
	藤原俊国		○	
	藤原兼頼			○
葉室家				
	藤原光俊	2〈五／十五〉		
	藤原定嗣	2		
	定円	2		
	藤原高定	1〈二／七〉		○
	藤原光泰	1		
式家				
	藤原基長			○
南家				
	藤原経範	〈七／二〉	○	
	藤原茂範	〈六／一〉	○	○
	藤原範氏			○

建長二年（一二五〇）の対策及第を経て、文章博士、式部大輔等を務め、正二位大蔵卿に至った。現存する作品は少なく、『鳩嶺集』に「太上法皇」「院」のための願文からの摘句六聯、『和漢兼作集』に漢詩一聯と和歌二首を残す程度であるが、菅家長者としての活動も知られ（「北野天満宮注進案」（鎌倉遺文五一七四五）等）、当時の菅原氏を代表する儒者であったことは間違いない。

彼の経歴を一覧していて気が付かれることは、名門の家に生まれながらその官位の進み具合に大きな波があることである。すなわち、若い日には遅々たる歩みであったのが、中年以降になって一気に加速しているのである。例えば同じく年譜に挙げた菅原在匡（一一三四～?）は彼の叔父在章の息で、彼のいとこにあたるが、二歳年下ながら、彼より三年早い宝治元年（一二四七）に対策及第し、その後の官位でもある時期までは彼を上回っている。それが最終的には在嗣が逆転することになるのであるが、そのターニングポイントとなるのはいつだろうか。

年譜を見るならば、それは在嗣が東宮熙仁親王（後の伏見院）に近侍するようになった弘安二年（一二七九）頃、彼が四十九歳の頃ではないかと考えられる。飛鳥井雅有の「春の深山路」九月一日条には、次のように在嗣の忠勤が賞せられたことが記されている。[14]

その後、廂へ帰り参りたれば、按察殿（東宮に仕える女房か）対面あり。人々多く奉公すれども、御師とく（侍読）在嗣朝臣と二人程、殊に不便に思し召さるる由、度々仰せあり。

連句や和歌を愛好した東宮から愛顧を蒙っていたことが分かる。この後弘安十年（一二八七）には践祚した伏見院の侍読に補せられ、翌正応元年（一二八八）には従三位に至り、伏見院の後、後伏見院、後二条院の侍読も務め、晩年まで改元に関わるなど活躍した。

それに対し、在匡は宝治元年（一二四七）十四歳の頃から後嵯峨院の院文殿作文に列席、その数か月後に対策及第している。その年には他にも近衛兼経邸での文事に参加し、連句の執筆を務めたことが葉室定嗣の日記『葉黄記』などに見える。早熟の才人であったのだろうか。文永四年（一二六七）、三十四歳の時に亀山院の侍読に任ぜられ、その息後宇多院の侍読も務め、特に亀山院内裏での活躍が史料からうかがえるが、弘安二年（一二七九）八月二十八日に御書所作文に参加したことを伝える記事以降、彼に関する史料は残されていないようである。ただ『尊卑分脈』の「侍読亀山後宇多御書所別当文章博士正四位下弾正大弼式部大輔治部卿刑部卿讃岐守為祖父之子」という官位は現存する史料から確認しうる官位とほとんど変わらないので、この後数年で死去あるいは出家した可能性もあろう。

東宮学士や侍読という東宮や天皇に近侍する役職が儒者の地位を計る上で一つの目安となることはすでに別稿で指摘したが[15]、在嗣と在匡という二人の儒者について見るならば、亀山院、後宇多院という大覚寺統の天皇の許での活躍が目立つ在匡と、伏見院、後伏見院という持明院統の天皇への近侍によって大きく進路の開けた感のある在嗣は、皇統の交替によって人生の明暗を入れ替えたように見える[16]。

なお、在匡の対策に際しては大きな相論が起こったことが知られている。すなわち、同じ菅原氏の公長（一二二四～一二七二）との間でどちらを上座とすべきか争い、結局年齢は下であるが、前長門守正四位下公良の息子である公長よりも、祖父従二位行刑部卿淳高の養子となっている在匡の方を上とするということがあった[17]。史料を検索すると、このことをめぐっていくつかの興味深い証言を見出すことが出来る。

未の剋許、刑部卿（菅原淳高）の亭に向かひて閑談す。秀才座次相論勘文の事、示し合はす所なり

（藤原経光『民経記』寛元四年（一二四六）十二月十日条・原漢文）

この記事の一か月前の十一月十日の陣定で在匡と公長の座次相論について識者に勘文を提出させることとなり、経光もそのメンバーに含まれていたが、勘文を制作する前に在匡の祖父（であり、この相論では養父）の淳高と打合せを行っていたというのである。淳高と経光との間には個人的な交流があり、在匡に有利となるよう計画したのであろう。

『民経記』には、後年経光の息子たちが在匡の許を尋ねて詩作と歌合を行ったという記事（文永四年（一二六七）三月七日条[18]）や、在匡の父在章邸を尋ねた経光が、たまたま居合わせた在匡と顔を合わせたという記事（同年十二月八日条）もあり、経光と淳高―在章―在匡という菅原家三代の交流は家族ぐるみのものであった。

釈奠なり、…（中略）、講師は公長。公長多く人々の詩を読み得ず、尤も不便なり。其の才在匡に及ばず。茂才座次相論の時、予定めて在匡道理の由を申す。今之を見るに廟鑑に背かざるか。

（葉室定嗣『葉黄記』宝治二年（一二四八）八月三日条・原漢文）

釈奠は孔子を祀る大学寮の行事。そこで講師を務めた菅原公長は上手く人々の詩を読み上げることが出来なかった。その無様な様子を見た記主定嗣は、やはり公長の才は在匡に及ばない、前年の座次相論で自分は在匡を支持したが、それは菅公（菅原道真）の御心に背かないものであろう、と書く。定嗣が在匡を高く評価していたことがうかがわれる記事である。

定嗣は言うまでもなく真観（光俊）の弟である。相論の陣定では勘文の読み上げと定文の執筆を行うなど事情を熟知する立場にあった。

また、冷泉家本『和漢兼作集』に新たに発見された下巻一二九裏には真観の息定円が在匡に送ったと見られる一聯が残る。

寄讃州菅刺史
無利無名無世事　有風有月有秋心

利害も名誉も世間の煩わしさも無く、ただ自然の風や月、そして秋を味わう感性のみが有る境地を夢想する詩句であり、内心の吐露であろう。

これらを考え合わせるならば、葉室家の人々も在匡をよく知り、詩の贈答をするような関係にあった。

在匡の作品は『和漢兼作集』の四聯のほか、『鳩嶺集』に漢詩句八聯、後嵯峨院のための願文等からの九聯が残る。『鳩嶺集』（永仁三年（一二九五）序）[19]は、社僧良清の編纂による、石清水八幡宮ゆかりの漢詩文を部類別に類聚する摘句集であるが、在匡は良清らとの連句を残すなど、石清水八幡宮で行われていた文事にも積極的に参加していたことが分かる。

それぞれは片々たるものであり、史料の残存状況も勘案しなければならないが、これらの資料から浮かび上がってくる在匡という人物の像は、文永から弘安にかけて、亀山院・後宇多院内裏を中心に様々な文事に関わり、多くの人々と交友した儒者というものではないだろうか。「現存三十六人詩歌」に当代を代表する詩人の一人として選ばれているのはそうした像を裏付ける評価であろう。

四

『和漢兼作集』の話に戻ろう。

「新院御製」を後宇多院の詠と考えるならば、『和漢兼作集』には、後嵯峨院、亀山院、後宇多院が入集する。おそらく従来考えられていた通り、本書成立の背景には後嵯峨院に始まり、亀山院、後宇多院と受け継がれた好文の傾向があるのであろう。そうした傾向を背景に漢詩を収集、選定するのに適当な人物は誰か。

改めて36頁の【表2】『和漢兼作集』「二十八品幷九品詩歌」「現存三十六人詩歌」入集当代儒者比較一覧を見て、他家を圧倒して多く入集している菅原氏の人物、文永から弘安年間にかけて内裏を中心とした文壇で活躍し、周囲からも評価されていた人物、そして和歌の選定に大きな影響を与えたと見られる真観の周辺とも親しい人物、と考えれば菅原在匡が有力な候補として挙げられるのではないだろうか。

しかし、すでに見た通り、彼の動向は後宇多院治世の弘安二年（一二七九）以降知られず、数段階を経ていると考えられる『和漢兼作集』成立にどの程度関わっているかは不明で

ある。また、この推定は『歌書目録』が菅原在嗣による撰とすることを完全に否定するものでもない。在匡の手によってある程度まとめられたものを在嗣が増補したという可能性もあろう。そうした場合、在匡の活躍と、おそらくは失速、そしてその後の在嗣の躍進という鎌倉時代儒者の歴史の一結節点に『和漢兼作集』が存在していると言うことが出来るのではないか。

以上『歌書目録』の記述を起点に、菅原氏の在嗣と在匡という二人の儒者の動向から『和漢兼作集』漢詩撰者について考察を試みた。入集作品についてのより詳細な分析や当時の文壇全体の整理など、なすべきことは多いが、今後の課題としたい。

注

（1）以下本稿では、在位時、譲位以降に関わらず、天皇を「～院」に統一して称することとする。

（2）安田徳子「続拾遺和歌集成立の周辺―亀山院と藤原為氏―」（『後藤重郎先生傘寿記念和歌史論叢』和泉書院・二〇〇〇）が亀山院内裏の特色として「詩歌両方を講じること」の多さを指摘している。また、錦武彦「鎌倉中期の和漢兼作者―『現存三十六人詩歌』をめぐって―」（『鎌倉時代中後期和歌の研究』新典社・二〇一二）はそのような詩歌が同時に詠まれることの多かった環境が和漢兼作者を生成し、尊重されることにつながったとする。

（3）和田英松による謄写版『和漢兼作集』が一九二六年に発表され、その後大曾根章介・久保田淳編『御所本和漢兼作集』（笠間書院・一九七二）に影印、図書寮叢刊『平安鎌倉未刊詩集』（宮内庁書陵部・一九七二）に翻刻とそれぞれ解題が収められた。また、『新編国歌大観』は図書寮叢刊の影印を底本とする。

（4）『冷泉家時雨亭叢書四六　和漢朗詠集　和漢兼作集　尚歯会和歌』（朝日新聞社・二〇〇五）に影印及び後藤昭雄による解題が付される。その後、後藤「『和漢兼作集』下巻の基礎的考察」（『成城国文学』二六・二〇一〇）において、下巻の錯簡の整序が行われた。

（5）島津忠夫・日比野純三編著『別本和漢兼作集と研究』（未刊国文資料・一九七六）

（6）和田英松『本朝書籍考證』（明治書院・一九三六）。また、日比野純三は官位表記から成立を建治三年の一月二十九日から九月十三日の間に限定できるとしている。日比野「御所本「和漢兼作集」の作者表記及び成立年代について」（『名古屋大学国語国文学』四〇・一九七七）参照

（7）前掲注6和田著書

（8）久保木秀夫「岡山大学附属図書館池田家文庫蔵『歌書目録』翻刻」（『国文学研究資料館文研資料部）調査研究報告』二三・二〇〇一）

（9）木戸裕子「『御所本和漢兼作集』の和歌（一）」（『鹿児島県立短期大学紀要』四六・一九九五）参照。また、宗尊親王の和歌についても、現存する九首のうち、五首が真観撰による『瓊玉和歌集』と共通することも選歌志向の類似として指摘できよう。

（10）前掲注5で島津忠夫が「後京極摂政良経の場合、書陵部本の現存の部分に見られる漢詩七聯のうち、一聯が出典未詳のほかは、

一聯が『元久詩歌合』、五聯が『三十六番相撲立詩歌』であることは、詩句の採録に当って必ずしも特殊な資料を博捜したものではなかろうということを思わせる」と述べていることが参考となろう。

(11)『岡山大学国文学資料叢書三　二十八品幷九品詩歌　現存三十六人屏風詩歌』（福武書店・一九七五）

(12) 前掲注11及び注2銚武彦論考参照

(13) 前掲注3の大曾根章介・久保田淳編『御所本和漢兼作集』の解題は撰者にふさわしい人物として、藤原基家、藤原光俊の子息達に加え、「菅家の人々」を挙げる。

(14)『日本古典全集　中世日記紀行集』（小学館・一九九四）。なお、これに先立つ五月二十八日の記事にも東宮御所で探題の作詩に加わったことが記されている。

(15) 拙稿「儒者の家における家説の伝授―広業流における天皇奉授の歴史を中心に―」（『生活と文化の歴史学4　婚姻と教育』竹林舎・二〇一四）

(16) なお、在嗣の父良頼は後深草院、在匡の父在章は亀山院の侍読をそれぞれ務めており、良頼→在嗣父子は持明院統、在章→在匡父子は大覚寺統という区別があったようである。

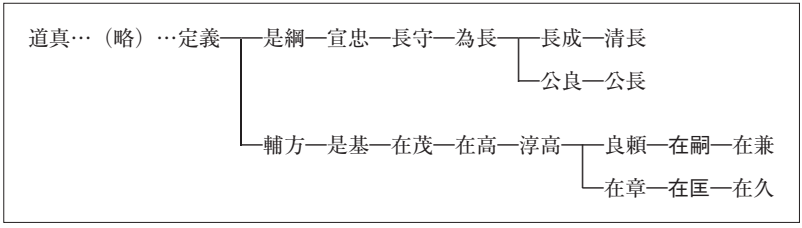
(17)『葉黄記』寛元四年（一二四六）十一月十日条、宝治元年四月二十七日条、同年六月一日条、同年六月八日条など

(18) おそらく三月十日に亀山院内裏で行われた詩歌合に備えるための稽古であろう。

(19) 拙稿「『鳩嶺集』出典考」（『文藝論叢』六六・二〇〇六）、福島金治「鎌倉中期の京・鎌倉における漢籍受容者群―『管見抄』と『鳩嶺集』のあいだ―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一七五・二〇一三）参照。

（にき・なつみ　明石工業高等専門学校准教授）

【表3】菅原氏略系図



【表４】菅原在嗣・在匡年譜

	在嗣年齢	在嗣事績（出典）	在匡年齢	在匡事績（出典）
貞永１(1232)	1	誕生（『公』）		
文暦１(1234)			1	誕生（『葉』寛元４年11月10日条記述より換算）
仁治３(1242)			9	４/13　「史記」夏本紀を受ける（同中華民国国立中央図書館蔵本）
				12/　給穀倉院学問料（『葉』宝治１年４/27日条）
寛元２(1244)	13	１/23　能登大掾（『公』）	11	
		１/28　宗尊親王蔵人（『平』）		１/28　宗尊親王侍者補任（『平』）
寛元３(1245)	14	12/17　東宮（後深草院）蔵人（血脈類集記）	12	
寛元４(1246)	15	１/29　蔵人（『中原師光朝臣記』）	13	
				11/10　菅原公長との間で座次相論。諸道の博士らが勘申する（『葉』『民』）
宝治１(1247)	16		14	３/20　院文殿作文参加（『葉』『百』）
				４/20　院文殿作文参加（『葉』『百』）
				６/１　公長との座次相論につき院評定（『葉』）
				６/８　陣定により、公長の上臈となることが決まる（『葉』）
				７/８　献策。問答博士は藤原経範（『葉』）
		８/15　釈奠について奏上（『弁内侍日記』）		８/15　近衛兼経邸作文「勝地月光明」。作文後の連句の執筆を務める（『葉』）
				９/13　近衛兼経邸において、白楽天影を掲げた「史記」講書。その後作文・歌会・連句に参加。連句の執筆を務める（『葉』）
				12/12　従五位下（『経俊卿記』）
宝治２(1248)	17	12/25　宗尊親王御書始に参加（『葉』）	15	12/25　宗尊親王御書始に参加（『葉』）
				閏12/14　近衛兼経邸作文「雪深賢聖家」に参加（『葉』）

建長 1 (1249)	18	1／　文章得業生(『桂』)	16	
		12/20　課試(『公』)		
建長 2 (1250)	19	1／　対策(『桂』)	17	
		1 / 5　従五位下。蔵人(『公』)		
		1 /23　筑後権守(『公』)		
建長 3 (1251)	20	1 /22　遷民部少輔(『公』)	18	
建長 5 (1253)	二十八品幷九品詩歌勧進			
建長 6 (1254)	23		21	1／　式部少輔(押小路文書兼国勘文)
建長 7 (1255)	24		22	1 /22　兼出雲権守(押小路文書兼国勘文)
建長 8 (1256)	25	1 /21　従五位上(『公』)		
正元 1 (1259)	26	10/ 2　宸筆御書を大原山陵に奉献次官(『後愚昧記』)	24	
				12/20　式部少輔辞退(『民』)
				12/25　亀山院御即位叙位。従四位下(『民』)
文応 1 (1260)	29	8 /28　遷式部権少輔(『公』)	27	
弘長 2 (1261)	30	3 / 1　正五位下(『公』)	28	
弘長 3 (1262)	31	1 /28　転式部少輔(『公』)	29	
		12/21　去式部少輔(『公』)		
文永 1 (1264)	33		31	1 /21　治部卿補任(「妙槐記除目部類」)
文永 2 (1265)	34	1 / 5　従四位下(『公』)	32	
文永 3 (1266)	35		33	11/ 2　近衛基平と詩の贈答(『深』)
文永 4 (1267)	36		34	1 /21　亀山天皇侍読・讃岐守(「新抄」)
				3 / 7　藤原経光の息子(兼頼、兼仲カ)、在匡宅にて講詩・歌合(『民』)
				3 /10　亀山天皇禁裏にて詩歌合。「春日山望」「秋夜旅情」「禁裏佳趣」の題を選申する(『民』)

				4/25　御書所作文参加(『吉続』)
				5/12　宮中での百日詩御会満足。「詩境春秋富」参加(『吉続』)
				11/7　藤原淳範献策の問頭博士を務める(『民』)
				12/8　父在章邸にて藤原経光と会う(『民』)
文永5(1268)	37		35	2/19　三万六千神祭祭文を草する(『深』)
				6/25　亀山天皇第一皇子の名字撰申に際し、在章の撰申した「景仁」を吉例とす(『吉続』)
				8/15　宮中詩歌御会、参加(『吉続』)
				9/16　近衛基平の関白第二度辞表を草する「草表有隠士句事」(『民』)
文永7(1270)	39		37	9/23　御前にて閏月があった場合の九月尽御会について質問を受ける(『吉続』)
				9/30　宮中九月尽詩歌御会、参加(『吉続』)
文永8(1271)	40	1/5　従四位上(『公』)	38	
				1/9　宮中詩歌御会始に参加。講師の一人を勤める(『吉続』)
				1/21　宮中作文「雨露叶春情」。所労により詩を献じるのみ。なお、「文人不及広」の天気により、藤原基長は参加を希望するも勅喚されず(『吉続』)
				1/29　釈奠の題について質問を受ける(『吉続』)
				2/1　除目。棟望の申文を草するも、禅門より書様に不備があることを指摘される。この時治部卿(『吉続』)
				2/10　吉田経長、在匡が子息在久の昇殿を所望していることを宮中、院に奏上す(『吉続』)
文永11(1274)	43		41	3/11　後宇多天皇侍読・従四位上行治部卿兼文章博士(「勘仲記文永十一年暦記」『砂巌』所収「菅儒侍読臣之年譜」)

文永12 (1275)	44		42	4 /25　改元に際し勘文を草す(『師守記』)
建治 2 (1276)	閏 3 /　「現存三十六人詩歌」成立			
	45		43	7 /22　御書所別当補任(『勘』)
建治 3 (1277)	46	2 /14　文章博士(『公』)	44	
		去文章博士(『公』)		
弘安 2 (1279)	48		46	4 /12　院作文、連句に参加(『吉続』)
		8 /25　文章博士(『公』)		
				8 /28　御書所作文「歓情歳月長」、参加。時に刑部卿(『勘』)
弘安 3 (1280)	49	5 /28　東宮(後の伏見院)御所にて探題の作詩に加わる(『春の深山路』)		
		9 / 1　東宮への侍読としての忠勤を評価される(『春の深山路』)		
弘安 6 (1283)	52	6 /26　鷹司兼忠邸五十番詩合に参加。その後の連句にて息在兼が執筆を務める(『勘』)		
弘安 7 (1284)	53	3 /20　24日の御書所作文の出題及びその後の連句に参加(『勘』)		
		3 /22　菅原高長の北野社仁王講に参加。題者を務める(『勘』)		
		8 / 2　釈奠奉行(『勘』)		
弘安 9 (1286)	55	4 / 5　藤原兼仲邸にて終日「史記」談義(『勘』)		
弘安10 (1287)	56	8 /13　鷹司基忠太政大臣辞表を草する(『勘』)		
		11/ 6　伏見院侍読(『伏見院御記』『菅』)		
		11/12　伏見院に「史記」を奉授(『伏見院御記』『続史愚抄』)		
正応 1 (1288)	57			3 /17　男在久死去(『尊』)
		3 / 8　従三位(『公』『勘』)		
正応 2 (1289)	58	1 /17　内裏詩会に参加。御製講師を務める(『勘』)		
		1 /29　鷹司兼忠邸の作文・連句に参加。読師を務める		

		(『勘』)		
		10/18　大蔵卿(『公』)		
正応 4 (1291)	60	3 /25　正三位兼越後権守 (『公』)		
永仁 1 (1293)	62	8 / 5　改元勘文を草する (『勘』)		
永仁 2 (1294)	63	4 /13　従二位(『公』)		
永仁 4 (1296)	65	4 /13　参議(『公』)		
		5 /15　兼式部大輔(『公』)		
		10/24　辞参議(『公』)		
		12/30　去式部大輔叙正二位 (『公』)		
正安 1 (1299)	68	4 /25　改元勘文を草す		
正安 2 (1300)	69	3 / 6　大蔵卿(『公』)		
正安 3 (1301)	70	3 /18　止大蔵卿(『公』)		
		12/ 5　北野作文に参加(『吉続』)		
		12/15　後二条院侍読(『菅』)		
乾元 1 (1302)	71	12/23　後深草院六十賀の寿命経薬師仏供養の願文を草する(『吉続』)		
乾元 2 (1303)	72	閏 4 / 3　亀山上皇冥道祭願文を草する(昭訓門院御産愚記)		
		8 / 5　改元勘文を勘申する		
嘉元 4 (1306)	75	12/ 7　改元勘文を勘申する (『実躬卿記』)		
延慶 1 (1308)	77	4 /12　薨去(『公』『尊』)		
尊卑分脈		式部大輔筑後守民部少輔式部権少輔正二位参議大蔵卿文章生長者文章博士侍読伏見後伏見後二条		侍読亀山後宇多御書所別当文章博士正四位下弾正大弼式部大輔治部卿刑部卿讃岐守為祖父之子

『公』…『公卿補任』、『尊』…『尊卑分脈』、『葉』…『葉黄記』、『平』…『平戸記』、『民』…『民経記』、『百』…『百練抄』、『桂』…『桂林遺芳抄』、『深』…『深心院関白記』、『勘』…『勘仲記』、『菅』…『菅儒侍読年譜』、『吉続』…『吉続記』